

教育研究と図書館の役割

Bunkyo University Shonan Library –Its Role in the Activities of Education and Research–

八代隆政*

Takamasa YASHIRO

はじめに

本稿は、真鍋龍太郎文教大学湘南図書館長の諮問に対して2002（平成14）年7月24日に提出された「文教大学湘南図書館中期基本構想に関する答申」（小林年春、鈴木正紀、中村保彦、八代隆政4名による共同執筆）をもとに、筆者が最近の動向を含めて加筆訂正したものである。

同答申は、1985（昭和60）年に湘南図書館が設置されて17年が経過した時点で、これまでの歩みを振り返りつつ、当時の状況を踏まえて今後図書館をどのように方向づけていくかという課題と解決策を検討したものである。本稿では、答申以降の状況の変化及び将来への新たな見通しについて加筆した上で、現状と問題点を再確認し、本学湘南キャンパスの教育研究活動における図書館の役割についての今後を展望する。本稿の構成は、湘南図書館の創設から現在までの流れを辿った「1 湘南図書館の歩み」、湘南図書館が現在どういう状況下にある、どのような課題を抱えているかを問題提起した「2 現状と問題点」、その問題解決へ向け図書館の方向性を探る「3 湘南図書館の方向性と将来構想における基本方針」からなる。

1 湘南図書館の歩み

1-1 概観するにあたって

湘南図書館が設置されて23年になる。図書館創設当時（1985（昭和60）年度）と最近（2006（平成18）年度）の状況を比較すると、建物および蔵書は、建物総延べ面積 $2,421\text{m}^2 \rightarrow 3,639\text{m}^2$ 、蔵書 $109,000 \text{冊} \rightarrow 199,065 \text{冊}$ 、年間受入雑誌 $316 \text{タイトル} \rightarrow 1,796 \text{タイトル}$ と著しい規模の拡大をみた。利用者サービスの面では、奉仕対象学生数 $1,427 \text{名} \rightarrow 3,464 \text{名}$ 、年間館外貸出冊数 $3,700 \text{冊} \rightarrow 23,727 \text{冊}$ 、ILL（Interlibrary Loan：図書館間相互貸借及び文献複写提供）年間総件数 $40 \text{件} \rightarrow 1,994 \text{件}$ へと、これもまた飛躍的な伸びを示している。さらに検索環境や利用環境の点では、伝統的なカード目録に代わって、図書館内外のコンピュータ端末からネットワーク上で蔵書を検索することができるOPAC（Online Public Access Catalog：利用者用オンライン蔵書目録）へ、紙媒体の冊子体目録や索引からオンラインデータベースへ、そしてインターネットを介して関連論文を見つけだし、その論文の全文がその場で閲覧・印刷出力できる電子ジャーナルの提供へと大きく変貌を遂げている。これは、図書館の業務システム上の大きな変化と相まって、コンピュータ・ネットワークの社会的インフラ化によって図書館の諸々の機能が建物の壁を破って外部へと広がっていく、いわゆる“偏在”から“遍在”へのプロセスでもあった。

以下に23年間の短い軌跡ではあるが、図書館の発展過程を区分してその特徴を概観する。

*文教大学湘南図書館館長補佐

1-2 第1期（1985（昭和60）年～1989（平成元）年）：図書館づくりの第一歩

湘南図書館は1985（昭和60）年に情報学部と短期大学部の共用の図書館として創設された。発足から国際学部が新設される前年の1989（平成元）年までの5年間は、大学図書館として本格的な活動を可能にする基礎・土台づくりの期間と位置づけられる。

職員数は、新規採用者及び学内異動者を加えて、旗の台時代の5名から10名へ、その後増員され1989（平成元）年には13名となった。蔵書は、旗の台から引き継いだ109,000冊をもとに、情報学部分として越谷図書館から約16,000冊が移管され、翌1986（昭和61）年には情報システム学科新設分として洋書約3,000冊が購入された。1989（平成元）年には、移転当時のほぼ倍近い19万冊規模の蔵書を有するまでになった。

しかし建物については、湘南キャンパスにあっては図書館以外の施設・設備の整備に力点が置かれた関係で、当初予定した建物の半分しか完成を見ず、20万冊規模の収容能力しか持たなかったために早くも書架狭隘化の問題に直面しなければならなかった。

資料収集に関しては、研究図書館機能を志向するという前提に立ち、各分野の学術書・専門書と基本的参考図書を優先し、学生向けの入門書や教養書の類は文庫・新書シリーズで対応していくというのがこの期の基本的収書スタンスであった。

この時期は、所蔵資料の組織化に最も重きが置かれた。目録規則と分類規程の標準化や適用細則の作成などによって、利用者と所蔵図書を結びつけるツールであるカード目録の品質向上にかなりの力が注がれた。また、雑誌の契約の見直し、受入作業の効率化、管理方法の体系化がなされた。1985（昭和60）年から1989（平成元）年までの期間は、利用者本位で活発な利用サービス活動を前面に押し出すというよりも、来るべきサービス展開を見据えて、そのサービスを可能とする図書館の土台づくりの時期であった。

1-3 第2期（1990（平成2）年～1993（平成5）年）：利用者サービスの本格的始動

この時期は、ハード面（建物、設備、蔵書等）とソフト面（人員、業務組織、サービス等）とも漸く大学図書館としての体裁を整えた段階として位置づけられる。

1990（平成2）年、国際学部新設にともない図書館は収容能力の限界を解決するため増築され総延べ面積3,639m²（約1.5倍）に拡張された。また国際学部設置用として図書約35,000冊（和書：21,000冊、洋書：14,000冊）、雑誌約260タイトルが新たに購入された。

蔵書は20万冊を超えていくが、建物の増築にともないサービススペースが拡張されたこと、特にオーディオブース12台、ビデオブース12台を設置したAV（視聴覚）コーナーが1Fにオープンしたことは特筆すべき点である。授業教材としてビデオ媒体資料を活用するケースも出てきて、教育研究資料のマルチメディア化現象が顕れ始めたのもこの時期である。

施設・設備および蔵書規模の拡大、そして学生数の増大（1989（平成元）年度3,127名→1993（平成5）年度4,565名）によって学生の図書館利用実態に大きな変化が生じた。年間入館者数は、国際学部創設の前年（1989（平成元）年度）が86,041人であったのに対して、国際学部完成年度の1993（平成5）年度には159,012人と2倍近く増加し、年間貸出冊数も7,974冊（1989（平成元）年度）から13,418冊（1993（平成5）年度）と7割増となった。利用者の内訳では、1989（平成元）年度時点の年間貸出冊数が短大生6,378冊、四年制学生1,596冊と短大生が圧倒的だったのに対して、1993（平成5）年度には前者が4,682冊、後者が8,736冊、短大生対四年制学生の利用比が4：1から1：2へと逆転した。利用される図書の主題の面でも、社会科学分野の図書の利用が6倍増となり、文学及び自

然科学（栄養学・食品学が主）を除いて各分野とも四年制学生の利用が短大生の貸出冊数を大きく上回るようになった。それにつれて資料収集の面でも、社会科学系の図書と雑誌を中心とした収集が進み、文学を中心とした人文科学系の資料の受入比率は徐々に落ちていった。

このような利用者増と利用動向の変化の中で図書館は、資料組織化中心の段階から、利用者サービスにも力点を置く段階へと移行していった。図書館報の発行、新着図書展示コーナーの設置、利用のための各種リーフレットの作成・配布、館外掲示板による各種案内と新着図書ジャケットの掲示、増加図書リスト・逐次刊行物リストの発行など、学生向けの広報活動が活発に繰り広げられた。1991（平成3）年4月からはライブラリー・ツアー（図書館司書による館内案内）や担当教員と協力してゼミの学生を対象に図書館の効果的な利用方法や関連主題の資料紹介を行なうゼミ向けガイダンスも開始された。

1991（平成3）年10月にはNACSIS-IR（学術情報センターの情報検索用オンラインデータベース）を導入することによって国内外の資料と所在の検索が可能となり、利用者の資料要求に幅広く応じることが可能になった。外部データベースの活用や他の図書館との協力・相互利用を促進することによって、レファレンス及びILLサービスの利用が増し、図書館サービスの内容は次第に拡がりを見せ始めた。

また、図書館の公開（学外サービス）として、1991（平成3）年に茅ヶ崎市立図書館と協定を結び、茅ヶ崎市民に対するサービスを開始した。大学図書館としての特性から、専門主題の調査・研究を目的とする市民に対して、館内閲覧、文献複写、レファレンスなどのサービスを提供することになった。

1-4 第3期（1994（平成6）年～1999（平成11）年）：電算システム化と図書館サービスの発展

1995（平成7）年から1996（平成8）年にかけての学園のLAN構築に対応して湘南・越谷両図書館は1997（平成9）年にサーバー・クライアント方式の図書館システム（LIMEDIO）を導入し、湘南図書館の電算システムは1998（平成10）年から全面稼動した。この電算システム化によって、「整理業務の標準化・効率化を図りシステム化」し、「OPACで提供されていない資料の遡及入力を計画的に実施し、書誌データベースの拡充」に努めた結果、「大学独自のデータベースを構築」し「OPACを提供し、外部への公開を促進」という『新私立大学図書館改善要項』（1996年）の資料組織化部門での目標が達成されたといえる。

年々増加する学生の図書館利用は、蔵書構築に関わる収書方針にも変化をもたらした。すでに述べたように、草創期の資料収集は研究図書館機能を志向するという前提に立ち、各分野の学術書・専門書と基本的参考図書を優先して収集するという傾向が強かったが、現実には予算規模や学部学科資料との調整等に問題があり、蔵書と利用の間にズレが生じていた。図書館側のサービス体制の整備が進み、学生の利用要求が高まる中で、このようなズレを解消するため、学生の需要・要求に見合う図書、特に授業・レポートに関わる基本文献や教養書を優先して選書・購入するという方向に次第に転換していくようになった。

一方、学生数が1996（平成8）年には在籍者数4,921名、図書館入館者も同年には延べ入館者数175,484人（1日平均713人）、学生1人当たり年間貸出冊数5.1冊、ILL年間依頼件数1,386件（半数以上は学生の申し込み）へと増加の一途を辿る状況に対して、利用者サービスの基本方針を下記のとおり明確にして対応した。

① まずは学生の足を図書館に向けさせること

- ② 要求の大小、質やレベルの高低、種類の如何を問わず来館した一人一人の学生の要求に最大限に応じること → 来館した学生を手ぶらで帰さないこと
- ③ そのためにレファレンスサービスを中心とする利用者への人的支援を強化すること
- ④ 人的支援の強化のために専任職員の適正配置、サービス部門の協働体制の確立、利用者の情報要求に応えるための各種外部データベースの導入を図ること
- ⑤ 一次資料（原報）へのアクセシビリティを保証するためにILLサービスを拡充すること

図書館サービス部門は、図書館所蔵資料や施設・設備・機器など図書館資源の有効利用を促進する「閲覧・貸出部門」、利用者の需要を掘り起こし、その利用要求に対してきめ細かい調査支援を行なう「レファレンス部門」、当館だけでは応じきれない要求に対して他大学・他機関の紹介、複写文献及び資料取り寄せを行なう「図書館間協力（ILL）部門」の3部門体制を確立し、利用者要求の把握から求める情報の調査と提供までの一連のサービス過程の中で3部門を統合する形で上記①から⑤に至る目標達成に精力を注いだ。

1-5 第4期（2000（平成12）年～2003（平成15）年）：IT化と利用者サービスの変容

18歳人口の減少及び財政逼迫を背景にした大学改革の中で、女子短期大学の臨時定員増の終了と3学科廃止によって湘南キャンパス在籍学生数は、1996（平成8）年の4,921名をピークに、それ以降漸次減少し続け、2004（平成16）年には3,566名になった。

一方、情報ネットワークの社会インフラ化によって加速された社会の情報化の波は、大学及び図書館における学術情報流通と学生の図書館利用行動にも多大な影響を及ぼした。

湘南キャンパスでは、1996（平成8）年のWIDE接続によってインターネット利用が可能になり、学生の多くは図書館よりもPC教室へ足を向ける傾向が強くなった。図書館の1日平均入館者数は減少の兆しを見せ、1996（平成8）年713人から2003（平成15）年355人へと半減している。図書館側では独自のホームページを開設し、OPACや各種データベースの提供、ネットワーク情報源へのリンクなど、非来館型利用者をも視野に入れたサービス活動を本格化させていった。

1990年代のサービス形態は、来館した学生の情報要求に応じて図書館司書が代行検索する方法が主流であった。しかし、2000年以降、WEBベースのデータベースが普及し、サイト契約を前提にIP認証によって学内LAN接続のすべての端末からオンラインデータベースの利用が可能になった。利用者は図書館に来館しなくても、PC教室や研究室から図書館のホームページにアクセスし、自由に必要なデータベースを利用することができた。レファレンス件数（1998（平成10）年：407件→2003（平成15）年：291件）が減少した原因のひとつには、利用者が自らインターネット経由でネットワーク情報源を利用し始めたことが考えられる。

一方、図書、雑誌など印刷媒体を中心とした図書館所蔵資料の利用については、入館者の減少とは逆に、学生1人当たりの年間貸出冊数が1996（平成8）年の3.9冊から2003（平成15）年には6.3冊に増加している。利用者は、ネットワーク情報源に傾斜する方向にあるのは確かであったが、一方で伝統的な媒体である図書を利用する行動様式も維持し続けていたことも忘れてはならない。

1-6 第5期（2004（平成16）年～現在）：教育研究支援環境の充実へ向けて

引き続き情報ネットワークの発展に応じて、図書館では情報検索環境及び情報アクセス環境を漸次整備している段階である。電子ジャーナルについては、2003（平成15）年導入時の全文アクセス可能タイトル数は約4,000タイトルだったが、2006（平成18）年度には8,228タイトルに倍増している。湘

南図書館の予算だけではなく、越谷図書館と協力して効率のよい契約を締結する調整作業の結果でもある。洋雑誌の年間受入数が313タイトル（2006（平成18）年度）、バックナンバーを含めた洋雑誌の所蔵総数が672タイトルに比べると、10倍以上のスケールアップとなっている。2005（平成17）年度に大学院が設置されたこととも関係するが、研究環境については飛躍的に改善されたといえよう。

学術情報の提供については、図書館ホームページ上で下記の情報提供を行っている。

- ・ オンライン所蔵目録（OPAC）
- ・ 文献検索データベース（CiNii、MAGAZINEPLUS、大宅壮一文庫雑誌記事索引検索、医中誌Web、First Search、LLBAなど）
- ・ 新聞記事データベース（聞蔵Ⅱ、毎日Newsパック、ヨミダス文書館、日経テレコン21、ProQuest NewspaperDirect）
- ・ 国内雑誌記事・本文データベース（日経BP記事検索サービス、官報情報検索）
- ・ 電子ジャーナル（ProQuest ARL、EBSCOhost ASP、SourceOECD、SocINDEX with Full Textなど）
- ・ 辞典類（JapanKnowledge）
- ・ 本学紀要

本学紀要論文については、2005（平成17）年度からNII（国立情報学研究所）の学術雑誌公開支援事業に参加し、3学部発行の紀要の収録論文データを学術コンテンツ登録システムによって登録している。データはNII論文情報ナビゲータCiNiiで公開され、本文へのリンクもされている。

最近の利用動向の特筆すべき点を列挙すると以下のとおりである。

- ① 入館者数はさらに減り続け、ピークだった1994（平成6）年度年間180,607人から2006（平成18）年度年間77,084人と半分以下となる。
- ② 市民利用が、1996（平成8）年度年間15人から2006（平成18）年度年間2,603人と大幅に増加した。2006（平成18）年5月1日現在登録している学外者は220名であるが、その内茅ヶ崎市民が140名、寒川町民が32名で、全登録者の8割近くが近隣住民である。館外貸出冊数は年間1,082冊であった。
- ③ 館外貸出冊数については、情報学部が学生1人当たり年平均4.5冊前後、国際学部が同10冊前後でここ3年間横ばい状態が続いている。ただし、女子短期学部は2004（平成16）年度4.4冊、2005（平成17）年度3.2冊、2006（平成18）年度2.5冊と下降の一途を辿っている。
- ④ ILLサービスを通じて、他大学図書館からの依頼が増加している。図書の貸出がこの3年間、246冊 → 247冊 → 252冊で微増であるのに対して、雑誌論文の複写が、448件 → 601件 → 779件と飛躍的に伸びている。
- ⑤ 日経BP記事検索サービスによる全文アクセス数が高い。2006（平成18）年度の年間アクセス数は11,256件で、上位は「日経ビジネス」（3,353件）、「日経コンピュータ」（3,276件）、「日経情報ストラテジー」（951件）、「日経ソフトウェア」（793件）、「日経LINUX」（635件）が占める。

2 現状と問題点

2-1 図書館インフラについて

(1) 蔵書・収書

湘南図書館の蔵書冊数は学生1人当たり57.3冊で、2005（平成17）年度の私大平均73.3冊を下回る。学生1人当たりの図書年間受入冊数は1.1冊であり、私大平均2.2冊の半分である。資料費についても、

学生1人当たり15.5千円で、私大平均の24.6千円を下回っている。全国平均と比してかなり低いといわざるを得ない。また、資料に占める洋書の比率が、私大平均が25.9%であるのに対して、湘南図書館は17.7%に止まっている。雑誌の受入数については1,794タイトルで私大平均の1,538タイトルを上回る。洋雑誌については313タイトルと私大平均の403タイトルを下回るが、これは洋雑誌を印刷体から電子ジャーナル（8,228タイトル）へ移行しているためである。

利用実態から見ると、学生の年間館外貸出総冊数が20,872冊であり、同規模（2～4学部からなる）私立大学の1館平均17,663冊を上回る。国際学部学生では1人当たり館外貸出冊数が9.8冊で私大平均7.3冊を上回っている。情報学部学生1人当たりが4.3冊、女子短期大学部学生1人当たりが2.5冊と低い。これら数値には資料利用における各学部の教育研究分野の特性の違いが顕れている。国際学部は、国際関係や地域研究など図書と雑誌を併用した利用があるが、情報学部については、コンピュータ及び経営・ビジネスなどの分野における最新情報を求める利用者が多く、図書よりも雑誌論文記事やネットワーク情報源への利用要求が高い。顕著な例として、日経BP記事検索サービスによる全文アクセス数が極めて高いことが挙げられる。

講義概要で指定された図書の網羅的購入、リクエスト、教員推薦図書制度など、蔵書構築に関わる学生や授業の要求に応えるシステムは整備されている。蔵書構築について大きな障害となっているのが、資料関係予算が学内に分散している状況があり、さらに学部では「人头費」という形で個人単位で執行されてしまっていることである。予算が分散化し、学部学科購入資料の全学的な共用化が図られていないことは深刻な問題である。

(2) 建物・施設

施設・設備面では、図書館入り口が1階にあり、図書館を利用する際には2階の入館ゲートまで必ず階段を上がらなければならないという構造的な問題を抱えている。閲覧座席数は398席あり、収容定員数の12.8%で基準の10%を満たし閲覧スペースには余裕がある。視聴覚ブース・再生機器が設置から20年近く経過し、老朽化によって故障や不具合が頻繁に発生したため、2007（平成19）年度末に視聴覚什器・機器の大幅入替を行なう予定である。図書館の蔵書収容能力は26.5万冊あるが、うち書庫部分を除くと開架スペースは19.1万冊収容可能である。現在の所蔵は、開架図書14万冊に消耗図書を加えると19万冊を超え、既にほぼ満杯状態であるため、早急に対策を検討しなければならない。

(3) ネットワーク環境

図書館ネットワーク環境は年々整備され、現在各階にOPAC端末が置かれ蔵書検索の利便性はある程度保証された。パソコンコーナーに設置している利用者用パソコン18台はすべてキャンパスLANに接続されておりインターネットの利用が可能であるため、ネットワーク上の情報源を自由に利用することができる。また、2階と3階にある33席の個人用キャレルにはLANが敷設され情報コンセントが設置されているため、持ち込みのパソコンによってネットワークに接続することができる。

2-2 図書館サービスについて

(1) 利用者教育

効果的な図書館利用を促進するため、各種図書館利用ガイダンスや文献検索ガイダンスを実施している。新入生図書館利用ガイダンスは、4月から7月までの期間に1年生の必修授業内に実施し、OPACの実習と図書館ツアーを行なっている。2年生以上に対しては、クラス単位、ゼミ単位で、

授業や研究内容に則したデータベースの利用方法を中心に文献検索ガイダンスを随時実施している。ただし、教員への電子ジャーナル利用講習会は、2003（平成15）年度導入以降、年1回の頻度で開いていたが、この2年間実施されていない。全文アクセス可能タイトルが8,000を超える状況にあって、利用環境を整備し、積極的な利用を促進する支援活動を開始しなければならない。

(2) 情報流通の変貌

図書館は本を選択・収集し、それを組織化（分類や目録）することによって、利用者を求める情報へと案内してきた。優れたコレクションと効果的な組織化が利用者を的確な情報へ導くとされていた。しかし、近年のインターネットの発展はその構図を変えつつある。図書館の提供する資料が図書館の建物の中になくという現象が起きた。一つはネットワーク契約を結んだ全文データベースや二次情報データベースである。もう一つは、インターネット上にあるさまざまな情報である。情報源の利用が印刷媒体以外のネットワーク情報源へと傾斜し、これがレファレンスサービスの利用件数の減少となっている。情報流通媒体そのものが変貌することによって、図書館を取り巻く状況として、「不均質な情報資源の混在」すなわち自館の図書館資料と他の図書館の資料、さらにはネットワーク上の情報との混在状況が生まれた。そこから、異なる情報資源（伝統的な紙資料と電子資料、自館資料と外の機関にある資料など）をシームレスに扱う図書館を意味する「ハイブリッド図書館」構想も登場してきた。

図書館の役割は、異種の情報資源を調整・統合して、学生が「問題解決の方法と技術」を身につけ最終的に情報を入手できるところまでの支援を行なうことにある。そのためには、構造物としての図書館、物理的な図書館資料、来館という空間的行動によってはじめて享受できる図書館サービスといった従来のあり方に加えて、ネットワークによる図書館機能の遍在化を通じての新たなサービス戦略を構築する必要がある。

(3) 開館時間

開館時間は授業開講期平日20:00までであるが、最終授業終了が18:10であることから、2時間弱の余裕がある。現状では、湘南キャンパスの立地条件のために20:00の時点で学内にほとんどの学生がいない状態である。2005（平成17）年度の19:00-20:00の入館者は1日のうちの0.77%というデータ実績から見て、また、キャンパスの交通手段の不便さを考慮しても、さらに延長する必要は現時点ではないと判断している。

2-3 図書館情報資源の組織化について

(1) 検索環境

電子ジャーナル及び各種データベースについては、EBSCOhostやProQuestといった複数のアグリゲータと契約しているため、プラットフォームが複数存在し、利用者はアグリゲータやデータベースごとに別々に検索しなければならない。緊急避難的ではあるが、2005（平成17）年度に導入したEBSCO AtoZによって、本学で利用できるすべての電子ジャーナルについて、一元的に雑誌タイトルまたは雑誌の主題から検索し、本文へリンクする環境に改善された。完全に統合的な検索環境を構築するリンクリゾルバーの導入を含めてネットワーク電子情報源の利用環境整備は最優先すべき課題といえる。

(2) 横断検索

OPACにおける越谷図書館との一元的な横断検索が課題といえる。いくつかの理由から当初は別々のデータベースを構築することになった経緯がある。現在ではシステム的には湘南・越谷両図

書館OPACの統合あるいは横断検索が可能となりつつある。技術的に可能性は広がったが、コード体系や各フィールドの使用方法にかなりの隔たりがあり、すぐには着手できない状況である。

2-4 組織と運営について

(1) 図書館司書の専門職制

各プロジェクトの実行主体であり、実際の行動プログラムを目標に向けて有効に実現していくのは図書館司書である。司書を専門職として位置づけ、育成のためのトータル研修プログラムが整備されていないため、個々の司書の持っている技術や能力、そして活動が組織全体に還元されていない欠点がある。このことは結果として組織力の低下を招きかねない状況にあるといえる。埋没してしまっている個々の能力や実績を再発見・再認識し顕在化すること、それらを組織に還元し継承することは、図書館の諸問題を検討・解決していく契機となるだろう。

大学の教育・研究を支援する組織として図書館がその機能を十分に果たすためには、教員や学生の教育・研究・学習活動に資する学術情報支援サービスをより充実したものとしなければならない。そのためには、学術情報支援サービスを担う司書の基準・要件・職位などを明確にすること、司書を専門職として位置づけ適正に配置すること、さらには専門的職能を高めるために計画的な育成システムを確立する必要がある。

(2) 運営体制

予算縮小期における事業展開については予算枠内での組み替え運用が必要となる。また同時に、特に増員の期待が持てない状況では、限られた人的資源の有効活用を再考しなければならない。従来の一般的な業務システムを前提とした業務組織や分掌並びに人員配置では、情報ネットワーク下でのサービス戦略に対応できない。情報ネットワーク時代に適合し得る業務ラインの再構築を考えなければならない。

3 湘南図書館の方向性と基本方針

3-1 従来型図書館からの発想転換

大学設置基準の大綱化、少子化現象に起因する「大学冬の時代」への対応、自己点検・評価にともなう「大学改革」、インターネット普及に象徴される情報ネットワークの進展による学術情報流通の変貌といった中で、大学図書館サービスのレベルを上げる方策として、施設・設備を充実させるほか、図書館資料費を増額させることが即効性のあるものであろう。しかし財政・予算の縮小化が進行し、図書館への予算配分の増額が難しい状況下では、拡張主義によって問題を解決することは困難である。また、学生利用実態の変容や情報資源の多様化に対応するためには、業務の効率化と図書館所蔵資料の提供という従来サービス方針だけでは立ち行かなくなってきた。予算、施設設備及び人員が制限されている条件下では、<資料の網羅的収集→組織化→提供>や<施設・設備の拡張とその提供>といった旧来のリニアなストック型図書館を維持することは到底不可能である。むしろ利用者のニーズや要求に柔軟に対応できる複眼的なフロー型図書館への転換が有効である。そのための基本方針は次のとおりである。

- ① 図書館の活動領域（ドメイン）を再定義すること
- ② 学生及び教員の利用行動実態を調査・分析し、それに見合ったサービスプログラムを作成すること
- ③ プログラム目標達成のために業務の見直しや再編を行ない、行動主体である図書館司書のフッ

トワークを十分に生かすべく組織・体制のリエンジニアリングを目指すこと

- ④ 効率のよい情報提供を行なうためにハイブリッド化した情報資源の調整・統合を行なうこと
- ⑤ 図書館司書の専門職制を明確化し、行動主体である司書の質的レベルアップを図ること

3-2 図書館活動領域（ドメイン）の再定義

一般に従来の大学の姿勢は、すでに学習の方法を身につけてきた学生を受け入れて専門的な人材養成を行なうというものであった。しかし、1990年代を通じて検討され提示された方向性は、大学は自ら学習できる学生を育てなければならないというものに転換された。今後の図書館の活動領域は、学生の自立への支援という前提に立脚して、狭義の教育・授業の支援といった学習図書館機能の充実だけでなく、もっと広く定義して、学生が学ぶときに、さらには大学という場で行動・生活する際に生じるさまざまな問題をどう解決していくかという観点に立ち、問題解決の糸口となるように図書館が積極的にコミットし支援する、というように再定義できる。その環境づくりのために図書館は、学生が日常的に感じている図書館に対する規制やプレキヤや壁を発見して、それをリリースするような実践が求められる。「学生のキャンパスライフへのサポート」というコンセプトを図書館サービスの出発点としなければならない。

3-3 利用者のセグメント化とサービスプログラム

インターネットの普及に見られる情報インフラの整備によって、学生の図書館利用行動に変化が生じた。来館型利用者に加えて非来館型利用者を想定しなければならない。利用者、特に学生との関係が見えにくくなってきた現在、第一に図書館がしなければならないことは、利用者（学生）の顕在化した要求はもちろんのこと、潜在的需要を把握・分析し、それらをカテゴライズすることである。利用者を細分化、セグメント化することによって、それぞれの利用階層毎に個別のサービスプログラムを作成する。さらに、最も有効と考えられ得るプログラムに図書館のサービスエネルギーと資源を集中投下する、という図書館サービスの再構築が必要である。ニーズの掘り起こしと利用者のセグメント化のためには、教員との連携による情報収集、E-mailや投書箱の利用、学生モニター制度、アンケート調査等々、非来館者を含む学生との接触手段やコミュニケーション・チャンネルを多様化し複線化することが考えられる。

また、今後の行動プログラムを作成するにあたり、要求のすべてに総花的に対応することは不可能である。当館にそれほどの体力はない。予算、施設・設備及び人的資源を見ればそれは明らかである。最も重要とみなされるものや最優先すべき要求に絞り込む必要がある。

以上のような利用者の差異化とサービスプログラムの重みづけという観点から導き出されるサービス戦略と行動計画策定の基本方針は次のようにまとめることができる。

- ① 利用に直結する重点分野の資料収集と情報の提供：ストック型からフロー型へ
- ② 学生の利用行動に直結する施設・設備、資料配置及びサービススペースの再構築
- ③ 学生とのコンタクト手段確保のためのコミュニケーション・チャンネルの多様化

3-4 チーム制の導入

上記の方針から作成されたサービスプログラムの目標達成のためには、それを実現する行動主体である図書館司書、すなわち人的資源の有効活用が不可欠である。従来の図書館の組織構造は、「資料の収集－組織化－提供」といった一連のフローの効率化を前提とした業務システム化に重きが置かれ

ていた。しかし、情報ネットワークシステムの中では従来の「受入－整理－閲覧」といった固定的な組織構造を脱却して、環境変化に柔軟に対応できる業務ラインに再編成するか、あるいはラインに拘らない運用体制を構築していく必要がある。

プロジェクトを推進する原動力である図書館司書のメンバー構成を、現状の業務分担に固執せず、係を横断した形で編成することが有効である。図書館内セクションを横断した形でプロジェクト毎にチームを編成するのである。プロジェクトチーム編成は、既成のラインや組織の固定枠に拘束されずに自由な発想のもとに業務を推進することができるという自主性と創造性が生産力を高める業務運用形態である。また、サービスプログラムに限らず、ネットワーク情報源の統合的アクセス環境整備事業など、今後予想される事態への即応も可能となるであろう。ストック型からフロー型への転換の中で柔軟な対応が求められる状況では、図書館司書の潜在能力とフットワークを十分に生かせるような組織・体制のリエンジニアリングを進めていかなければならない。

3-5 ハイブリッド図書館への転換

インターネットの急速な普及により、電子情報が急激に扱いやすいものとなり、今もって刊行される紙媒体との混在に拍車がかかっている。情報資料を扱うことを本分とする図書館においても、伝統的資料（紙）と電子資料、自館所蔵資料と国外を含む他機関の所蔵資料というように異種の情報資源の混在、いわゆるハイブリッド化が進行している。利用者が求める資料を手にする方法も、図書館あるいは図書館経由の入手方法に加えて、端末から全文テキストが手に入る方法が加速度的に普及している。情報流通の変貌と多様化に呼応して、今後図書館として次のような方策が考えられる。

- ① 利用実態と予算の効果的な運用を考慮に入れた電子資料（電子ジャーナル等）の拡充
- ② ハイブリッド化した異種情報資料の組織化と提供サービス計画の作成
- ③ 越谷図書館OPACや外部データベースとの横断検索・同時検索環境づくり
- ④ 学生及び教員への情報リテラシー教育の実施
- ⑤ 図書館司書自身の情報リテラシー向上と特定主題に関する情報資料研究

3-6 越谷図書館及び学内関係部署との連携

情報ネットワーク基盤が整備されてきた状況では、湘南・越谷各図書館あるいは関係部署の業務が完全に独立した形で存在しているわけではなく、業務のいくつかは情報の共有化を含めて協力・協働体制を築いた方が効果的なものがある。

本学ではかつて湘南図書館、越谷図書館別々にキャンパスのニーズに合わせたデータベース、電子ジャーナルを導入していたが、この2～3年、両キャンパスで共有できるデータベース、電子ジャーナルについては、両図書館で共同分担契約している。今後、学術情報の基盤をなすデータベース、電子ジャーナルを安定的に契約し提供するためには、図書館課という一部局の予算で措置するよりは、大学の教学活動に必要なコストと位置づけ、全学的な共通経費として予算化していくことが望ましい。その第一歩として、2008（平成20）年度から湘南・越谷両図書館課のデータベース、電子ジャーナルにかかる費用を一本化し、越谷図書館課予算に置くことになる予定である。

図書館が策定するさまざまなサービスプログラムの中には、単独では実行できない場合がある。そのようなとき、行き詰る事態を好転させるには、活動領域がオーバーラップする外部組織と協力関係を築き、共に考え行動していく必要がある。

3-7 図書館司書について

図書館司書の質的向上と専門性を高めるには、図書館組織内でのOJT、外部研修及び自己研修などを通じたミクロな自助努力をさらに強化するとともに、図書館のあるべき姿と司書の位置づけを大学として全学的（マクロな）観点で明確にする必要がある。

2004（平成16）年11月、越谷・湘南両図書館合同ワーキンググループから両図書館長及び両館長補佐に対して、「意見と提案」（第1部：大学図書館及び図書館員のあるべき実体について（意見）、第2部：図書館関係の規程及び制度の改正について（提案））が提起され、2005（平成17）年2月、両図書館長連名の文書「図書館基本問題について」を添えて学長室会議に提出された。「意見と提案」では、本学における図書館の位置づけとその役割・機能、図書館の業務と専門性、図書館司書に必要な専門能力が示された。また、現行の図書館規程の改正案及び職員人事制度・図書館職員制度の改正案が提案された。2007（平成19）年9月の両図書館長協議会にて最終調整が行なわれた結果、図書館の役割を大学の学術情報流通基盤を担う存在として明確に位置づけることを明文化した図書館規程改正案がまとまった。改正案は、同年11月の大学審議会で承認され、2008（平成20）年4月から施行される。

文教大学図書館の方向性は、同規程の目的（第2条）と業務（第3条）に具体化される。第2条（図書館の目的）は次のとおりである。

- (1) 本学教職員及び学生が必要とする資料及び情報資源の収集、組織化並びに保存・蓄積に務めること。
- (2) 前号に規定する資料及び情報資源の提供並びに利用支援を通じて本学における研究、教育及び学習活動を支えること。
- (3) 国内外の学術機関等の学術研究の進展及び地域社会における文化の振興に寄与すること。

第3条に規定された①蔵書構築、②資料の組織化、③利用サービス、④図書館システムの運用管理、⑤他機関及び地域との連携、といった業務を遂行することによって、図書館の目的が達成され、本学で展開される教育及び研究活動に寄与することができる。

図書館が学術情報流通基盤として、学生や教員の学習・教育・研究活動に十分に機能するかどうかは、そこで働くヒト（司書）次第である。新図書館規程第3条に規定された業務を効果的かつまた円滑に遂行するのは図書館のヒト（司書）である。図書館は組織として、個人を活性化しヒト（司書）を育てるための仕組みをもっていないと求心力を失ってしまう。漸く本学図書館の目的と業務が明文化されるからには、今後、業務を遂行し目的を達成できるように、図書館のヒト（司書）を育てる仕組みを作ることこそ、図書館が本学の教育・研究にどれだけ貢献できるかの大事な鍵となる。